

学校法人 幼保連携型

ゆうゆうのもり幼保園（神奈川県横浜市都筑区）

職員数：31名 在籍園児数：210名（令和4年2月時点）

【子育て支援事業】

「子どもの自主性を重視する」「保護者と共に保育の実現を目指す」といった教育方針に基づき、保護者サークル活動の支援、一時保育、子育て相談等を実施している。

- ・保護者活動（委員会・サークル活動等）の支援
（地域の親子が交流する場の開設、交流の場での情報提供・相談支援事業）
- ・一時保育（一時預かり事業（施設型））
- ・電話相談（家庭への情報提供・相談事業）

◆年間利用者数：各種サークル参加者数 合計約30名、一時保育30名
（コロナ禍で現在の活動はほぼ休止中、少人数での活動は行っている）

◆財源：自主財源の他、一時保育事業補助金、私立幼稚園等地域開放推進費補助事業（神奈川県補助事業）を活用

子育て支援事業の内容

●保護者活動（委員会・サークル活動等）の支援

【概要】

日時	月曜日～金曜日 9:00～14:00 の登園時間、もしくは土曜日の活用
場所	園舎地下の保護者活動事業専用室「父母の会室」など
担当職員	幼児主任の保育教諭1名 「おやじの会」担当の男性保育教諭2名
対象者	在園児保護者
園や職員の役割	場所の提供、内容や実施の検討、保護者から相談があった際の対応

- 在園児の保護者どうしの交流促進のため、保護者が学級の行事等のサポート、もしくは運営を行う「委員会」、保護者の交流や、園で子どもが遊ぶ際のサポートを保護者が行う「サークル活動」（以下「サークル」）を支援している。
- 園は、「委員会」「サークル」が自由に使用できる部屋（園舎地下「父母の会室」）提供するほか、これらの会合に園の職員が参加し、保護者から「委員会」「サークル」の運営相談などに応じている。
- 「委員会」には、園の行事等の手伝いサポートする「クラス委員会」、行事の写真撮影や園新聞を発行する「新聞委員会」、卒園の準備をする「お別れ委員会」がある。



コロナ禍のため、バザーの代わりに行った『買い物ランド』の様子。商品はすべて廃材等で保護者が作りました。

- 「サークル」には、子どもに絵本の読み聞かせをする「おはなしのもり」、保護者同士で編み物などの講習会を開催する「あみちく」、父親が中心となった「おやじの会」などがある。また、姉妹園の港北幼稚園で組織された「KMO」という音楽サークルが、学期に1回、園児たちに演奏する機会もある。
- 最近では、卒園児の保護者による「根っこ会」も設立された。



KMO が活動している様子。現在は動画配信になっている。

【取り組む上での工夫】

園は保護者同士の活動を見守り、保護者同士の関係づくりを支援

- 「委員会」「サークル」の運営は保護者が中心に行い、園は活動の支援にとどめている。
- 保護者自身による委員会・サークル活動の運営を通じて保護者の交流が活性化することで、保護者同士が子育ての悩みを共有・協力し合う関係を築くことができる。

【現在に至るまでに克服した課題とその対応策】

就労している保護者と就労していない保護者の交流の促進を図る

- 本園のように幼稚園をベースに認定こども園になった園では、保護者活動は就労していない保護者の参加が前提の場合が多く、就労している保護者は活動に参加しにくい課題があった。
- また、園がある港北ニュータウンは比較的新興住宅地であり、この地に引っ越してきた人たちは他人とのつながりが希薄であるという地域の課題もあった。
- そこで、本園では、「委員会」「サークル」などの保護者活動を促し、さらに就労している保護者としていない保護者の両者に参加を求め、両者が交流できるようにした。
- 保護者による活動は、「できる人ができるときに」がテーマである。例えば、「委員会」では年間計画を作り長期的な見通しを立て、保護者が仕事の休みをいつ取ればよいか分かるようにしている。
- 一堂に会さなくてもメールでのやりとりで済む場合は、連絡はメールで済ませている。
- 保護者から要望があった際は、園の教育・保育時間外でも、園舎地下「父母の会室」を貸し出している。

父親が積極的に保護者活動に参加できる「おやじの会」を設立

- 父親が積極的に保護者活動に参加できるように「おやじの会」を開園時から立ち上げている。
- 上記の会ではディキャンプ、夕涼み会、バザーでの模擬店など色々な活動を子どもと一緒に楽しむことを通し、父親に子育ての楽しさを実感してもらっている。
- 「おやじの会」では、父親たちが集まって、親子でどのような遊びをしたら楽しいか、企画や準備も含め、父親たちに運営を任せている。特に夏のディキャンプでは、親子一緒に楽しさを体験できる機会となっている。
- 「おやじの会」ではディキャンプやバザーの手伝いなどの父親間での交流機会をつくるほか、会の活動支援は園の男性保育教諭が担当するなど、父親が参加しやすくなる工夫をしている。

- ディキャンプなどのイベントには、神奈川県「私立幼稚園等地域開放推進費補助事業」の補助金を活用している。補助金を園の職員の休日出勤手当等に活用している。

●一時保育

【概要】

日 時	毎週月～金曜日(7:30～16:00)
場 所	幼稚園の学級(1歳児・2歳児クラス)
担当職員	乳児主任の保育教諭1名 常勤フリー保育士3名
対象者	横浜市都筑区の未就園児(1歳～2歳、各2名まで利用できる)
定 員	各クラス1日2名まで
保育料金	2,400円(1日/1人)
利用登録	必要
園や職員の役割	保育の提供

- 「一時保育で利用している子どもたちにも、ゆうゆうのもりの保育の仲間になってもらう」という考えの下、幼稚園の学級(1歳児・2歳児クラス)に一時保育の枠を各2名分設置している。



一時保育の子が、保育室に心配そうに入っていく様子

【取り組む上での工夫】

一時保育の子どもと同年齢の在園児との交流を促す

- 預かる人数は各学級で2名までと多くせず、在園児のクラスに一時保育の未就園児を参加させ、同年齢の在園児と交流し自主的に遊ぶように誘導している。
- また、乳児クラスだけでなく、幼児クラスの様子も見ることで、園の保育を理解してもらう機会にしている。

【現在に至るまでに克服した課題とその対応策】

一時保育の「体験」を行い、保護者や子どもの不安を取り除く

- 一時保育を利用する子どもには、園に来て初めて同年代の子と関わる子どもや、同年代の子との接し方にまだ不慣れな子どもがおり、その様子を見て保護者は心配してしまうこともある。
- そこで、一時保育を利用していただく前に、親子で一時保育を「体験」する機会をつくっている。保護者が一緒に園にいて、未就園児は園に慣れることができる。



保育室で、在園児と遊びだす一時保育の子ども

- また、保護者には自分の子どもが園の中でどう過ごすか、在園児とどう関わるかを見られる機会になっている。
- 「体験」の際、担当職員は丁寧に、保護者から「日々の子育てで感じていること」「一時保育を利用する理由・背景」「お子さんの特徴・特性、特に保護者と離れて生活することや、集団生活等の経験の有無等について思うこと」を聞いている。こうすることで、園は保護者の状況や子どもの特性を把握して預かることができる。



一時保育の終わり、保護者に今日の様子を伝える場面

●電話相談

【概要】

日 時	毎週月曜日～金曜日(9:00～14:00)
対象者	横浜市都筑区在住の未就園児保護者・在園児保護者
相談件数	約30件(年間)
園や職員の役割	職員による相談の対応



電話相談後に面談を行う様子

- 未就園児、在園児問わず保護者の相談に対応する。乳幼児の子育てに関する相談のほか、未就園児の保護者による入園を想定した相談も受け付けている。
- 「子どもの発達が気になる」「障害があるかもしれない」といった相談内容は、臨床心理士との面談の機会を提供している。

【取り組む上での工夫】

- 一般には子どもの育児相談が中心ではあるが、時に母親の精神状態が不安定な場合もある。そのような時には、保育教諭が相談を受ける限度を超えている場合もでてくる。そこで、専門家である臨床心理士との面談を通して、母親への支援を行っている。

子育て支援事業を更に充実させていく上での課題・要望

- 社会全体に保護者の活動は面倒だと感じる方が多く、「面倒なことはやめよう」という風潮がある。保護者活動は、その人たちにとっては面倒かもしれないが、丁寧に活動すると子どもの成長がわかったり、保護者同士が親しくなったりと良いことも多い。認定こども園であるため、保護者の中には、就労している方もいれば、就労していない方もいる。そのような保護者がつながっていくことで、当園としては、子どもを預かってもらったらいではなく、積極的に他と子どもや保護者同士がつながっていくような支援していきたい。
- 開園時間が長い中で、就労の保護者と就労していない保護者に対して、できるだけ園からは同じような情報発信を心がけているが、そのことを進めようとする、結果的に保育教諭が土曜日出勤をしたり、勤務時間が長くなり、働き方改革を進められないことは大きな課題となっている。

子育て支援事業と地域子育て支援拠点事業の連携状況

- 港北区の地域子育て支援拠点「どろっぷ」（NPO 法人びーのびーの運営）とは、一時保育やプレ保育の情報交換（子育て支援拠点で、幼稚園選びや保育園選びの実施への協力、また、0～2歳で子育てに悩んでいる保護者への継続支援等）や幼児教育の専門家との意見交換（子育て支援に対する情報の交換等）を行うなどの連携を取っている。

【子育て支援事業で大切にしている思い】

保護者が自分の子ども以外の子どもと関わる経験をする中で、子どもとの関りを通して、地域の中で保護者同士協力したり、社会に関わる楽しさを知ったりと、親が親になっていく場を作れば良いと思っています。

関わりの難しい子が増えている要因のひとつに、やはり子育て環境の悪化を感じています。コロナ禍もあって、人とかかわることが苦手な保護者も含め、さまざまな保護者がいるなかで、どのように園がそのような保護者にアプローチしていくかは、これからはなおさら難しい課題になると感じています。